

2010年1月

「笛吹神社」

今年には日本の始まりとも言われる平城遷都から1300年を記念する年である。多くのイベントが予定されており、奈良を日本全国そして世界にアピールする活動が行われている。8世紀に読まれた万葉集の詩にもある通り奈良は今日の日本文化の基礎であるだけでなく、国際活動のハブでもあった。時代は違えども奈良という伝統文化と国際コミュニティーの一員であることを嬉しく思う。

新年にはその年の幸運を祈るために神社へ参拝するのが慣例行事である。笛吹神社には火の神である火雷神と音楽の神である天香山命の2つの神が祀られている。その理由で消防関係のグループが参拝に来る一方、フルート奏者や尺八、雅楽の笛の演奏者も上達を願い訪れる。初詣は古くからある神道の習慣である。日本人の多くが初詣は宗教的ではないと主張する。しかし、私から見ると精神的な信仰心や習慣が日本社会・文化に古くから深く根付いているので、自分達がいかに精神的であるかに気付いていないだけだと思う。

私は毎年葛城市にあるこの笛吹神社で初詣の奉納演奏を行っている。このような唯一無二の場所で演奏できることを大変光栄に思う。この神社は観光客が訪れるような場所ではないので、真冬の寒い時期に神社の境内で行う演奏を聞きに来る参拝者は少ない。しかし、お優しい神様はその寒さを察してか、演奏中は少し日だまりを分け与えて下さる。不思議なことに私が演奏を始めると、尺八の音を少しでも長く空気に留めておこうというように風が弱まる。初詣の演奏の前は神主からご祈禱を頂き、虚無僧の曲である古典本曲を演奏する。儀式の後に参拝客の方に向き直し、私のオリジナル曲を3、4曲演奏する。今年には葛城山麓の森の中にたたずむ笛吹神社を思っ作曲した「笛吹の深い森」という曲も演奏した。神主さんは、「たとえ聞きにきてくれる方が少なくても神様はこの曲の持つ叙情性とその思いを聞いて下さっているよ」と言って下さった。神主さん曰く神社は人間がいるからこそ生存する生き物なのだそう。だから神社では立ち止まって心の目を向けてみてほしい。神様がそこにいることを感じられるから。